



亀松太郎 (電波新聞 特約記者)

「終わった産業」からの反転 SEMIが描く人材再興戦略

「いまとは大きく異なり、半導体業界は人気がなかった」。そう振り返るのは、半導体の国際業界団体SEMIの日本支部「SEMIジャパン」で代表を務める浜島雅彦だ。いまや国家戦略の中核とされる半導体だが、ほんの数年前まで、日本の大学や若者の中で“希望の産業”と見られていなかった。「それでは、まずい」。SEMIジャパンが人材育成に注力するようになった背景には、そんな危機感がある。 (敬称略)

「半導体」という言葉を消していた時代

浜島がSEMIジャパンの代表に就任したのは、2018年。その当時、ある大学教授から「国に予算を申請するとき、“半導体”という言葉が消えている」と聞いて、ショックを受けた。半導体が「終わった産業」として見られていたことを象徴するエピソードだ。

1990年代以降の国際競争の敗北、企業再編や人員削減、そして、景気変動の大きい「シリコンサイクル」。学生たちは親世代から「半導体は不安定だ」「日本はもう勝てない」と聞かされ、進路として敬遠する傾向が強かった。

そのような状況を打開するため、「半導体業界について知ってもらうことが必要だった」と浜島は明かす。人材育成のための専従スタッフを雇い、学生向けのウェブサイトを立ち上げた。毎年12月に開催する展示会「SEMICON Japan(セミコンジャパン)」の人材関連イベントも強化した。

その後、経済安全保障の観点から、半導体産業の強化が国家戦略の重要テーマとなる。政府の強力な支援のもと、TSMC (台湾積体電路

製造)の日本進出や、最先端半導体の製造に挑むラピダスの設立が実現した。

「半導体に対する見方が大きく変わった」。浜島がそう述べるように、半導体業界にとっては追い風が吹いている。だが、人材不足は相変わらず大きな課題だ。むしろ、成長が期待される分、人材枯渇への危機感は一層強い。

人材育成は「2本柱」で

SEMIジャパンが描く人材戦略は、二つの柱からなる。一つは、学生へのアプローチだ。大学生や高専生に、半導体産業の魅力と可能性を伝え、進路の選択肢に入れてもらう。もう一つは、社会人のリスキリング(学び直し)である。異業種からの転職者や専門性を高めたい人材に対し、体系的な学びの機会を用意する。

「半導体は電気電子だけの世界ではない」。浜島は強調する。精密な装置を動かす機械工学や多種多様な材料の性質を理解する材料工学、データを分析して品質を高める情報科学など、多くの専門性が求められる。さらに、事業戦略やマーケティング、知財・法務の分野では、文系人材の力も欠かせない。

「半導体業界は、さまざまな分野の人材が活躍できる場。そのことを、学生に理解してもらうのが重

要だ」と浜島は話す。

学生向けの施策に加え、社会人に対しては、初心者からエキスパートまで幅広いニーズに対応した教育プログラムを提供しようとしている。SEMIジャパンの会員企業に協力してもらいながら、日本独自の学習コンテンツを充実させている。

グローバルで活躍できる人材をサポート

一方で、浜島は「日本の大学生はもっと勉強しないとイケない」と口にする。「自分も大学時代は遊んでいた」と苦笑しながら、「アメリカの大学では、学生が寝る間もなく、必死に勉強している」と指摘する。

世界中から集まった優秀な学生たちが、難関大学で最先端の半導体工学や情報科学を学んで、トップ企業に就職する。「生半可な勉強では勝てない。負けてしまう」。だからこそ、「頑張れる人が世界中で活躍できるように支援すること」を目指している。

国際業界団体であるSEMIの強みは、米国を中心として世界各地に拠点をもち、国際的なネットワークを形成していることだ。その特徴を生かして、「日本にとどまらず、グローバルで活躍できる人を後押ししていきたい」と抱負を述べている。



①SEMIは半導体産業の国際展示会「SEMICON(セミコン)」を世界各地で開催している

②2025年12月のセミコンジャパンでは、会期中の夜間に「WAKAMONO」NIGHT」と題した学生・若手社会人向けのイベントが開かれた